

明治維新
150年

「岩倉使節団」を改めて考える

私どもは自分がどんな顔の間人であるかを知っている。自分を「鏡」という他者に投影して、みずから確認しているからである。自己が他者をもたず完全に孤立している状態にあっては、自己がどんな存在であるかを確認することはできない。それゆえ「自我形成」もあり得ない。私どもは他者が自分をどう認識し、評価し、対応するのかに応じて、自己を初めて悟り、自我形成をつづける、そういう存在である。



拓殖大学学事顧問
前総長 渡辺 利夫

そうだった。自国とは成されたのだとみる。何か一という自我は薄くしか形成されてこなかったのである。アヘン戦争を経て大國・清國が、列強によって次々と蚕食されていくさまに目を見開かされ、ペリーの黒船来港によって強烈なインパクトを受け、日本の指導者は新しい自我形成を余儀なくされた。

日本よ 新しい自我形成に自覚めよ

この平和の中で、日本は欧米列強に競合できるような産業力や軍事力を整えてきたわけではない。

列強の目に映る日本は、文明国ではない。

に示すものが岩倉使節団の欧米派遣である。

それは外務卿である岩倉員視を特命全權大使とし、副使に参議の木戸孝允、大蔵卿の大久保利通、工部大輔の伊藤博文、外務省次官補格の山口尚芳の4名

を、実に1年9カ月にわたり訪問し、精細な観察を繰り返したのである。新井明治政府それ自体が、ユーラシア大陸を長駆一巡したかのとき壮図であった。

岩倉らの出発した明治4年(1871)11月といえは、その7月

えてやったのである。廃藩置県こそが明治維新の維新たるゆえんである。鎌倉幕府の源頼朝によって始められ、江戸時代にその完成期を迎えた幕藩体制と呼ばれる、徳川幕府を中央政府とし、二百数十の、多分に自立的な諸藩を配して形づくられてきたシステムの大転換である。

中央集権と地方分権の均衡のうえに成立してきたこのシステムを、一挙に廃止して中央集権的国家とする。府県を設置して中央政府の意を体した知事を中央政府から府県に派遣し、この知事が全権をもって地方を統治するといふ「革命」であった。それにしても、この想像さえできない不穏な時期であった。しかし、明治政府はそれをあ

「海洋の共同体」としての日本は、四方を海で囲まれ、海によって守られ、外敵の存在を意識することなく、国内の統治に万全を期していけば、平和はあらずと守られてきた。少なくとも幕末までは

みずから文明国となるより他に道はない。そういう新しい自我が形

務官、随員、留学生43名を加えた総勢108名の大デレゲーション(派遣団)であった。

明治維新政府の中枢部がデレゲーションを組んで、米国、英国、フランス、ドイツ、ロシア、その他、全12カ

これに不満をつのらせる旧藩の諸勢力が、各地で反抗の刃を研いでいた。新政府の中枢がこぞつて2年近くも日本を留守にすることなく、想像さえできない不穏な時期であった。しかし、明治政府はそれをあ

府は列強に就航させたのだろうか。他者たる文明国を、政府のトップが身をもって徹底的に研究し、自我形成をより優れたものにするためであった。

使節団は産業発展の重要性を徹底的に悟らされ、さらには共和制、立憲君主制、徴兵制、議会制度、政党政治、

宗教など、実に、文明のありとあらゆる側面について学んで、帰国した。この使節団の実感を一言でいえば、文明国のもつ文明の圧倒的な力であったといつていい。

その後の富国強兵・殖産興業政策が、さらには憲法と議会制度が次々とあきれるほどの速さで実現されていったのは、岩倉使節団の体得した知恵があったからだといつても過言ではない。

これほどの「自我形成」を往時の日本の指導者はやったのである。米国の覇権力が後退し、中国の膨張がともどもない。朝鮮半島は一触即発の様相を呈している。この状況にあつてなお日本は、憲法第9条の改定にすら逡巡し、「モリカケ」だの「日報」などをテーマに政争をつづけてやむことがない。

「事の軽重」がわからなくなってしまうほどに、日本の政治は劣化してしまつたのか。日本よ、新しい自我形成に自覚めよ。

少なくとも幕末までは

伊藤博文、外務省次官補格の山口尚芳の4名

岩倉らの出発した明治4年(1871)11月といえは、その7月

の、多分に自立的な諸

の、多分に自立的な諸

の、多分に自立的な諸

の、多分に自立的な諸